『通俗 英吉利単語篇』はなぜ売れたのか
――単語集変遷史から見た編纂意義の再考 ――

Why *Tsuzoku Igirisu Tangohen* Became so Influential:
Reconsidering the Significance of Compilation from the History of English Wordbooks in Japan

熊谷允岐
Masaki KUMAGAI

キーワード
英単語集、英語参考書、英語語彙学習、英学史
English wordbooks, Reference books for learning English, English vocabulary learning, History of English language studies

Abstract: This study focuses on the English wordbook: *Tsuzoku Igirisu Tangohen* [Book of Instruction for Members of General Public] that was published in the Meiji era, and attempts to clarify from several perspectives why this publication was more influential than other wordbooks published over the same period. While characteristics of *Tsuzoku Igirisu Tangohen* and its influence on other subsequent wordbooks have been explored, the significance of its influence in the Meiji era, or in other words, the significance of its compilation, have not been clearly discussed. In this study, three hypotheses are proposed as to why *Tsuzoku Igirisu Tangohen* became so influential in Japan: 1. The possibility that the author of *Tsuzoku Igirisu Tangohen's* name recognition had a significant impact; 2. The possibility that the quality of Tsuzoku Igirisu Tangohen had an impact; 3. The possibility that *Tsuzoku Igirisu Tangohen* was influential from a historical perspective. The results show that the third hypothesis is most plausible. In other words, *Tsuzoku Igirisu Tangohen* became more influential regardless of the author's name recognition or the quality of the material. Rather, the author's insight into the needs of learners at the time and his ability to seize the opportunity to publish it contributed to the influence of *Tsuzoku Igirisu Tangohen*.

1. はじめに

本論の筆者はかねて、明治時代に編纂された英単語集（以降、単語集）の変遷を調査するうえで、それらをいくつかの系統に分類した。そのなかの一つに「官版分野別単語集」と命名した系統が存在する。官版分野別単語集とは、開成所（幕府の直轄する洋学研究機関）が 1866 年に刊行した『英吉利単語篇』から強い影響を受けた教材群を総称したものである[1]。本論でとりあげる梅浦元善訳『通俗 英吉利単語篇』（1871）とは、上記系統の流れを汲んだ単語集の一つであることを予め述べておく。

2. 問題の所在

『通俗 英吉利単語篇』（以降、『通俗英単』[2]）は、これまで比較的盛んに研究対象となってきた単語集の一つである。たとえば、渡辺（1962a）では『通俗英単』の成立背景から内容に至るまで、詳細な報告がなされている。原口（1991a）は、『通俗英単』の訳語を 50 音順に現代仮名遣いで配列し直して、後続の研究者の便宜を図るとともに、『通俗英単』が影響を与えたと考えられる後年の英学書についてもいくつか報告をしている。また、『通俗英単』の内容に影響を与えた英学書については、櫻井（2000a）が詳しい。このように、『通俗英単』の特徴やほかの英学書との影響関係のおおよそについては、すでに明らかにされているといってよい。

他方で、蒲原（1985）の研究に注目したい。それによると、『通俗英単』は当時のベストセラーの一つであったらしく、著者の梅浦もこの出版をきっかけに、英学者としての地歩を固め、その名が広く知られるようになったのだという。「ベストセラー」といわれるからして、『通俗英単』は当時多くの英語学習者の手に渡って親しまれたのだろう。では、なぜ『通俗英単』はそこまでの好評を得るに至ったのであろうか。本書の発刊は明治の初期であったが、日本において、単語集は幕末からすでに盛んに編纂されていたため、『通俗英単』以外に単語集が皆無であったわけではない[3]。したがって、ほかの単語集の編纂状況が『通俗英単』の評判を押しあげた直接的な要因だとは考えにくい。当時の日本人にとっても、使用する単語集にはいくつかの選択肢があったはずなのである。それにもかかわらず、『通俗英単』が多くの日本人英語学習者に選ばれた理由については、従来明らかにされていない。これはある意味で、日本における英学史、ひいては単語集変遷史を考えるうえにおいて重要な役割を担ったと思われる『通俗英単』の編纂意義もまた、いささか不明瞭なままにされているといえよう。明治期の単語集変遷史をより正確に理解するにあたって、『通俗英単』の調査を改めて行うことが理論的に重要だといえよう。

3. 本論の目的と対象

本研究は、『通俗英単』が当時の日本で大きな影響力をもつに至った理由を複数の観点から検討し、『通俗英単』の編纂意義、ひいては日本の英学史上において『通俗英単』が担った役割について、一つの答えを導き出すことを目的とする。これまでの先行研究の成果もふまえて、『通俗英単』に対する一つの総括を行うことができれば幸いである。

本論ではまず、『通俗英単』の概要と本書が与えた後続の単語集への影響について、筆者の調

査も交えて概観する。つづけて、『通俗英単』が当時多くの日本人に迎えられ、その影響力を増大させた理由について検討を行うが、筆者はそのなかでつぎのような仮説を設定した。

1. 著者である梅浦元善の権威性が『通俗英単』の評価につながった。
2. 教材としての質の高さが『通俗英単』の評価につながった。
3. 『英吉利単語篇』を含む先行書の存在が『通俗英単』の評価につながった。

1. については現代においてもみられる事象であろうが、著者の知名度や権威性によって、その編纂物もまた多くの注目を集める可能性があるだろう。のちに詳述するが、類似の事例がほかの英学書編纂にもみられるため、一概に可能性を否定することはできない。したがって、著者である梅浦の人物像を通じて、彼の権威性と『通俗英単』の評価に関連性があるかを検討する。2. については字義どおりであるが、『通俗英単』が教材として優れている、すなわち学習が促進されるようなくふうが施されているのであれば、使用者に歓迎される可能性は高まる。『通俗英単』がこれまでの研究でどのような評価を下されているのか、そして同時期に刊行された単語集と比べて何か特徴的なくふうがみられるのかを調査し、本書の影響力増大に結びついているか否かを検討する。3. について、現代の事象でたとえれば、ある編纂物が著名となった場合、その続編や類書も、自然と人びとの注目を集める傾向があるのがそれであろう。繰り返し述べるとおり、『通俗英単』の源流は開成所の『英吉利単語篇』であるため、『英吉利単語篇』から『通俗英単』編纂までの系譜を改めて辿ることで、先行の英学書の存在が『通俗英単』の評価を高めることにつながったのかについて検討する。

以上、3 つの仮説に留意しながら考察を進めていくが、これらは必ずしも独立したものではなく、それぞれが複雑に関連している可能性も十分にあることを了解されたい。なお、本論では国立国会図書館に所蔵されている『通俗英単』の中で、デジタルアーカイブとして一般公開されているものを参照元として調査を行なった[4]。

4.『通俗英吉利単語篇』

4.1. 概要

明治時代を迎えると、日本政府は全国的な教育政策として学制を公布し、大学、中学、小学の三段階からなる近代の学校体系における基礎をつくりあげた。つづけて、英学本位制が導入されると、高等教育機関は歴史を除く諸学科のすべてを英語で教授するようになった。それに合わせて、各教育機関も拡充が行われ、官立の英語学校や英学私塾の数も急激に増加していった。巷でも英学ブームが沸き起こり、それに呼応するかのように英学書の刊行も爆発的に増加した。単語集もまた例外ではなく、そのような最中に編纂されたものの一つが『通俗英単』であった。

『通俗英単』は上下巻に分かれており、計 1,490 の英語見出し語を収録している。見出し語は “Part I” から “Part V” までの通し番号で区分され、さらにそのなかで大まかな意義分類が施されているものの、具体的な分類名は提示されていない。上下巻に分かれているという点を除けば、江戸期に開成所から刊行された『英吉利単語篇』の特徴をおおよそ忠実に引き継いでいる。ただし、熊谷 (2019) でもふれたとおり、開成所の『英吉利単語篇』は英語の見出し語だけが羅列されているにすぎないため、一種の語彙リストのようなものである。一方で、『通俗英単』では見

出し語の上部にカナ発音が添えられ、それぞれの見出し語に対応した訳語が振り仮名つきで併記されている。このことから、『通俗英単』は熊谷 (2020) で述べるところの「単語集」、すなわち語彙を記憶するための教材としての体裁が整っているといえよう (図 1)。

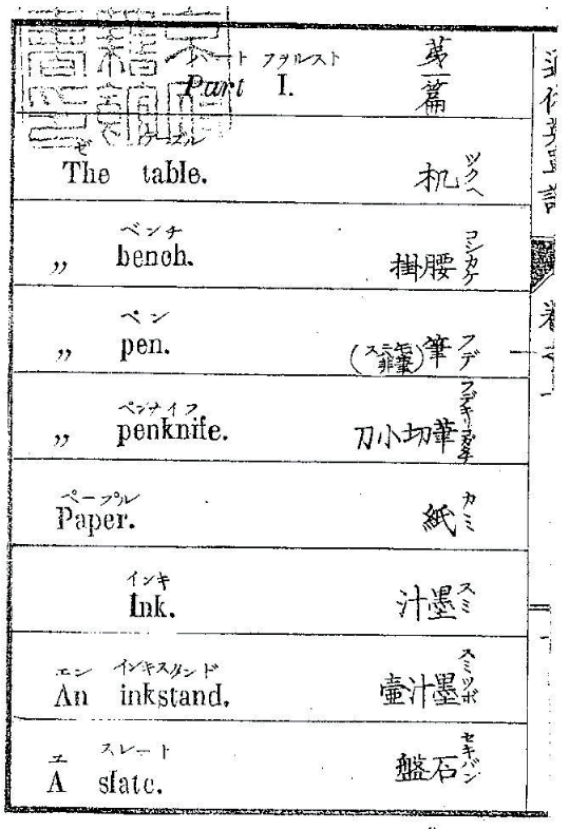

図 1.『通俗英単』上巻の Part I における初頁 [国会図書館蔵]

本来語彙リストのような内容であった教材が、単語集として再編纂された理由については、『通俗英単』上巻に付随する序文に明記されている。つぎが引用である。

> 今既に世に行はるゝ所の英吉利単語篇一小冊と雖も、切用枢機語大概此に輯まる。実に其室に入らんとする者の好門戸と謂つへし。故に平生これを諳記黙識[5] するものは、他日必らす思ひ半はに過ることあらん。然れとも山間僻遠師友に乏き人、其白本にして読難きを苦しむ。是に於て余綴語を其上に加へ、雅俗の訳語を其傍に付して以て之を梓に上し、彼童蒙をして進歩の一助たらしむと云爾

要約すると、既刊の『英吉利単語篇』は薄い小冊子でありながら、おおよその重要語は網羅されているため、英学を志す者にはよい入門書になるという。だが、師や友人が居ない地方の学習者にとって、従来の白本[6] の形式では独習するうえで非常に不便であるため、単語集として再編纂

したのだという。

櫻井（2000a）によると、現存する『通俗英単』にはさまざまな書誌的異同が存在するらしく、かなり頻繁に増刷を繰り返していたことが指摘されている。たとえば、渡辺（1962a）の報告によると、『通俗英単』上巻の見返し題には書名のほかに「一名英語早引」との文言が記されていたり、裏表紙見返しには「通俗英吉利単語篇二篇三篇近刻」[7] といった広告が掲載されていたりするというが、筆者が確認した国会図書館所蔵本には、同一の記述がみられない。どちらの形式が先に刷られたかという点はおくにしても、『通俗英単』の盛況ぶりがうかがわれる。

4.2. 後続の単語集への影響力

第 2 章でも述べたとおり、『通俗英単』はのちに編纂された多くの英学書に、その影響を残している。『通俗英単』とほかの英学書との影響関係を判断する基準は、おもに収録語とその語順、カナ発音や誤刻の類似性であるが、時に『通俗英単』の版木をそのまま利用するような様子もみられるため、その判断は比較的に容易である場合も多い[8]。各英学書との詳しい比較調査の結果については別稿に回すものとして、つぎの表 1 では、従来の研究で報告されている、『通俗英単』の影響を受けたとされる英学書と、筆者が新たに調査した結果として『通俗英単』との関連性が判明した英学書を年代別に示した[9]。

表 1.『通俗英単』の影響を受けたと考えられる後続の英学書一覧

書名	著者･編者･訳者など	刊行年	教材の種別	調査報告者
『袖珍 英和節用集』	吉田庸徳著	1872	辞書	原口（1991a）櫻井（2000b）呂（2000）
『英仏単語図解』	近山安則訳	1872	単語集	原口（1991b）
『改正増補 英語箋』（東京版）	島一徳校訂	1873	単語集・会話集	原口（1991a）櫻井（2000b）
『英学童観抄 巻之壹』	三木光斎著	1873	単語集	原口（1991a）渡辺（1962b）
『英学童観抄 巻之貳』	三木光斎著	1873	単語集	筆者
『西洋画引節用集 第二編』	井上廉平輯	1873	辞書	渡辺（1962c）
『英国単語字類』	外川正明訳	1874	単語集	原口（1991a）渡辺（1962d）
『改正増補 英語箋』（大阪版）	卜部精二訳	1874	単語集	原口（1991a）櫻井（2000b）
『学校入門 暗誦心の種』	若林長栄編	1875	雑書	原口（1991a）
『英学単語独案内』	中村愿編	1885	単語集	筆者
『英語独案内』	木田吉太郎編	1885	単語集	筆者
『袖珍英和独案内』	渡辺遂編	1885	単語集	筆者

注：筆者作成.

表 1 から、『通俗英単』は少なくとも 12 冊の英学書と関連していることがわかる。江戸時代および明治時代に編纂された英学書の解題を数多く収録した『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』（1962）においても、『通俗英単』ほど後続の英学書の依拠資料となる単語集はあまりみられない。このことからも、『通俗英単』の影響力の大きさは十分に推察される。『通俗英単』の影響を受けた英学書のほとんどは同系統の単語集だが、時には「節用集」と名のついた簡易辞書の依拠資料にもなっている[10]。さらに、『通俗英単』の影響力は 1885 年に出版された単語集にまで及んでいることは注目に値する。『通俗英単』の刊行年から数えると、その期間は 14 年であることから、本書は

さまざまな英学書に対して長期的な影響力をもっていたと考えてよいだろう。これは、『通俗英単』が当時の英学書編纂者のあいだにおいて注目に値する教材であったことを示すとともに、『通俗英単』を依拠資料として教材を編めば「売れる」という共通認識があったのかもしれない。もとを辿れば、『通俗英単』が当時の学習者のあいだで好評を得たからなのだろうが、影響を受けた英学書の中には『通俗英単』でみられる誤りが修正されることなく引き継がれていたり、『通俗英単』と同じ版木がそのまま使われていたりする様子もみられることから、本書の影響は必ずしもよいほうにだけ向いていたわけではなさそうである。

4.3. 仮説1：梅浦元善の権威性と『通俗英単』の関連性

本小節からは、『通俗英単』が日本の単語集変遷史において多大な影響力をもつに至った理由を明らかにするため、前述の 3 つの観点からそれぞれ検討を行っていく。第一に、『通俗英単』とその著者である梅浦元善の権威性との関連性について見ていく。

著者の権威性が編纂物になんらかの影響を与える様子は、江戸時代からすでにみられる。1860 年に出版された『商賈(しょうこ)外和通韻便宝』(以降、『商賈便宝』) がその好例であろう。本書は、横文字紹介書と呼ばれる綴字書の一種で、1859 年の開国・開港とおおよそ同時期に登場した(屋名池、1991)。屋名池によると、横文字紹介書は本来「一種の際物的な出版物」(p. 51) に位置づけられていたため、それらの多くは儒書や仏書などの、いわば「堅い本」を刊行する書物問屋ではなく、稽古本や草双紙、錦絵などを中心とした地本草紙問屋から発刊されていたのだという。つまり、従来の横文字紹介書はその際物的な性質ゆえに、格下の本に分類されていたのである。だが、『商賈便宝』は前に記したような際物の地本ではなく、れっきとした書物問屋を介して出版されていたとのことである。それについて屋名池は、「当時有名の書家の書を利用し、ローマ字は当時ごく少数しか在留していなかった外国人にコネをつけて書かせ、校閲は蘭学者にさせて、際物らしくない大判の美本に仕立てあげた」(p. 73) ことが一因だと示唆している。このようなことから、『商賈便宝』における編纂者たちは、ある種の「権威づけ」として機能していたと考えられる。8 年後の 1868 年に、日本初の商社である海援隊によって『和英通韻以呂波便覧』と名を改めて再販されたのも、『商賈便宝』の権威性が一定の需要に結びついていたことが一因であると推察することは可能であろう。

このような事例をふまえ、『通俗英単』に話を戻す。前述のとおり、元善は『通俗英単』の編纂を契機に英学者としての地位を固めていったとされるが、それ以前の経歴が梅浦の権威性をすでに形成していたのならば、元善の権威性と『通俗英単』の影響力における結びつきは十分に示唆されるといえる。元善の生涯について調査を行なった蒲原 (1985) の報告を中心に、当該の関連性を検討していく。

梅浦元善は 1852 年に生まれ、10 歳から漢学を学び始めた。13 歳にはオランダ語の初歩を修め、西洋医学の道に進み始めたという。元善の家系は代々医者が多く、祖父が漢方医で、元善の父もまた町医者として天然痘予防の啓蒙活動などに励んでいたというから、元善もその影響を受けるのは自然であろう。ただ、元善はのちに違う道を進み始める。明治元年を迎えると、当時 16 歳だった元善は箕作秋坪(みつくりしゅうへい)が東京に設立した三叉学舎に入塾し、ついで 1871 年から共立学舎に 2 年間通い、設立者の尺振八のもとで英学を修業した。のちに、県立の新潟学校では教頭に就きながら英語を教え、一時期は長岡洋学校においても指導を行い、新潟県の英語教育に寄与していたという。

ここまでをふまえると、医者の家系に生まれた元善は、幼少期から漢学・蘭学・英学を修めた

ことで、ある程度の素養は身につけていたと考えてよいだろう。また、彼の父や祖父が医学の分野で活躍していたことから、梅浦家自体には一定の知名度があった可能性はある。しかし、その点が元善自身の権威づけにつながったのかといえば、断定はきわめて困難である。父や祖父とは異なる道を歩んだ元善の編纂した『通俗英単』が、家系の知名度で影響力をもったというのも無理が生じる。より正確な解釈を行うには、梅浦家のより緻密な調査が必要となるだろうが、現時点においては蒲原も述べるとおり、『通俗英単』の刊行が元善の地位を押しあげたにすぎず、元善自身には前々から知名度があり、それが『通俗英単』の影響力を増大させた可能性は低いとみてよいだろう。

4.4. 仮説2：『通俗英単』の教材としての質

前小節では、『通俗英単』とその著者である梅浦元善の権威性との関連性を検討した。その結果、彼の権威性が『通俗英単』の影響力を高めた可能性は低いとの結論に至った。本小節では、『通俗英単』が教材として優れているか、すなわち学習が促進されるようなくふうが施されているかについて、先行研究における評価や同時期に刊行された他の単語集にふれながら考察を進める。

第一に、『通俗英単』の英語見出し語について考察する。『通俗英単』に収録される 1,490 語は、開成所の『英吉利単語篇』を踏襲しているため、『英吉利単語篇』の評価が『通俗英単』の評価にそのまま対応すると考えてよい。櫻井（2014）によれば、『英吉利単語篇』の Part I に掲載されている 30 語は『蘭文英文典初歩』[11] を参照としつつ取捨選択が行われ、残りの Part II から Part V にあたる 1,460 語は、*Traveller's manual of conversation in four languages, English, French, German, Italian.*（以降、*Traveller's Manual*）という 4 カ国語対訳の旅行者向け単語・会話集から抜粋されているという。*Traveller's Manual* の前半が分野別の単語集で、『英吉利単語篇』はそれから満遍なく語彙を抜き出し、Part II から Part V の見出し語に採用しているという。こちらも適宜、取捨選択が行われているとの報告だが、このような『英吉利単語篇』の編纂過程に対して櫻井は、「新しく創作された点はないが、多くの単語群から目下日本人に必要と思われる語彙を選び、底本の分類や配列にとらわれず、独自の語彙観によって編集していることもまちがいない」（p. 27）と評価している。ただし、このような点が当時の庶民の評価につながったかといえば、その可能性は考えにくい。現代ほど英語教育が普及していない当時において、人びとが教材の語彙選定の優劣を判断することは難しいと思われるからである。

第二に、『通俗英単』における英語見出し語の配列について考察する。配列についても、もともとの『英吉利単語篇』から変更がないため、『英吉利単語篇』に対する評価がそのまま『通俗英単』にも適用されると考えてよい。『英吉利単語篇』の Part I における 30 語は、“Paper.” や “Ink.”、“The slatepencil.” といった学校の教室で使うような語彙が集められているが、この点について櫻井（2014、p. 34）は「入門者が親しみやすい語から学べるように配慮して配置したものと思われる」と述べている[12]。渡辺（1962e、p. 125）は、『英吉利単語篇』が名詞しか収録していない点に限界を指摘しているが、同時に他のセクションにおいてつぎのような評価を下している。

> …語の配列は極めて整然たるもので、例えば Part IV が…身体各部の語から始まって頭部にうつり、頭部の語を尽して四肢にうつり、四肢の語を尽して内臓にうつり、内臓の語を尽して分泌物にうつり、分泌物を尽して…生理的行動を尽し、精神的感情に移る、という具合の実に見事な体系に貫かれている。学習テキストとしてこれ

以上は望めないと評しても過言ではないと思われるほどである。

出来（1980）も同様に、『英吉利単語篇』が非常に秩序だった語彙配列、および分類を行っているとの評価を下していることから、その特徴を踏襲した『通俗英単』の見出し語もまた、同様の評価を下すことが可能だろう。ただし、このような意義分類別に見出し語を配列する傾向は、『英吉利単語篇』系統のものだけにみられるわけではない。『通俗英単』と同時期に編纂されたものだけでも、青木輔清著『横文字独学』、橋爪貫一訳『英語字類』、弄月亭陳人抄撮『童解英語図絵 貳帙』（いずれも 1871 年刊）などがあげられる。とくに、『横文字独学』の見出し語は『英吉利単語篇』から抜粋した可能性が高い（渡辺、1962f）といわれており、その源流が『通俗英単』と一致する。さらに、『横文字独学』の序文には英語教師の少ない地方の学習者に向けて編まれたことが明記されていて、このような編纂姿勢もまた『通俗英単』と共通している。『横文字独学』は初編から三編まで編まれ、合本版なども刊行されていたことから、ある程度の需要はあっただろうが、『通俗英単』のように後続の英学書の依拠資料となるまでの影響力はもっていなかったようである。換言すれば、秀逸な語彙配列の採用が、『通俗英単』の需要を高めたとは必ずしもいえないというのが筆者の考えである。

第三に、『通俗英単』のカナ発音について検討する。もともとの『英吉利単語篇』にはカナ発音が採用されていなかったため、それらは『通俗英単』において追加されたものであるが、その質は決して高いものとはいえない。たとえば、“paper”を「ペープル」、“ruler”を「ルーレル」と記すなど、rの発音が江戸時代よりつづくオランダ語の発音から脱却しきれていない。“Earth”や“North”も「エルツ」や「ノルツ」のようにthを「ツ」と表記していて、このような様子は江戸期から刊行されている単語集と大きく変わらない。杉本（1985、p. 327）が指摘するとおり、「<wish（ウヰシ）. shop（シヨツプ）. brush（ブロシユ）>など、<sh>の発音はオランダ語的発音から脱却している」といった例はたしかにみられる。しかし、『通俗英単』以前にカナ発音をとり入れた『英吉利単語篇』系統の単語集である、『対訳名物図編』（後述）のそれらと比較してみると、そちらでは“wish”が「ウイッシ」、“shop”が「ショヲプ／シヨップ」、“brush”が「ブロッシ」と表記されている。『通俗英単』の示すカナ発音とは若干の違いがみられるものの、先に掲げた 3 語にかぎっては、『対訳名物図編』においてすでにオランダ発音から脱却している様子がうかがえる。すべてのカナ発音を比較したわけではないため断言はできないが、発音に関しては大きな進歩も退歩もみられないと考えるほうが妥当であろう。

第四に『通俗英単』の訳語だが、櫻井（2000a）や原口（1991b）も報告するとおり、それらは著者である梅浦のオリジナルではなく、江戸期に刊行された『英仏単語篇注解』（1857）に大きく依存している。本書は『英吉利単語篇』の日本語訳のみが収録されたもので、訳語のない『英吉利単語篇』と相互参照することで、対訳学習が行えるような仕組みとなっていた。『英仏単語篇注解』の訳語について、櫻井（1998、p. 85）は「慎重に吟味されており、各部での意味の違いまで正確に訳されているようである」と述べる。たとえば、*tongue*という語が『英吉利単語篇』には「身体」と「料理」という異なる部門でそれぞれ収録されているが、前者では単に「舌」と訳しているのに対して、後者では「舌（牛羊等ノ）」と注釈がつけられているという。櫻井は加えて、「Chess 将棊（シヤウギ）」などの英語の事物に対して日本的なもので代替する限界は指摘しながらも、全体的に見て明らかな誤訳はないと報告している。『英仏単語篇注解』を刊行した開物社とは、開成所教授らが組織した学術研究者集団である（櫻井、2014）ことからも、訳語の質が高水準である

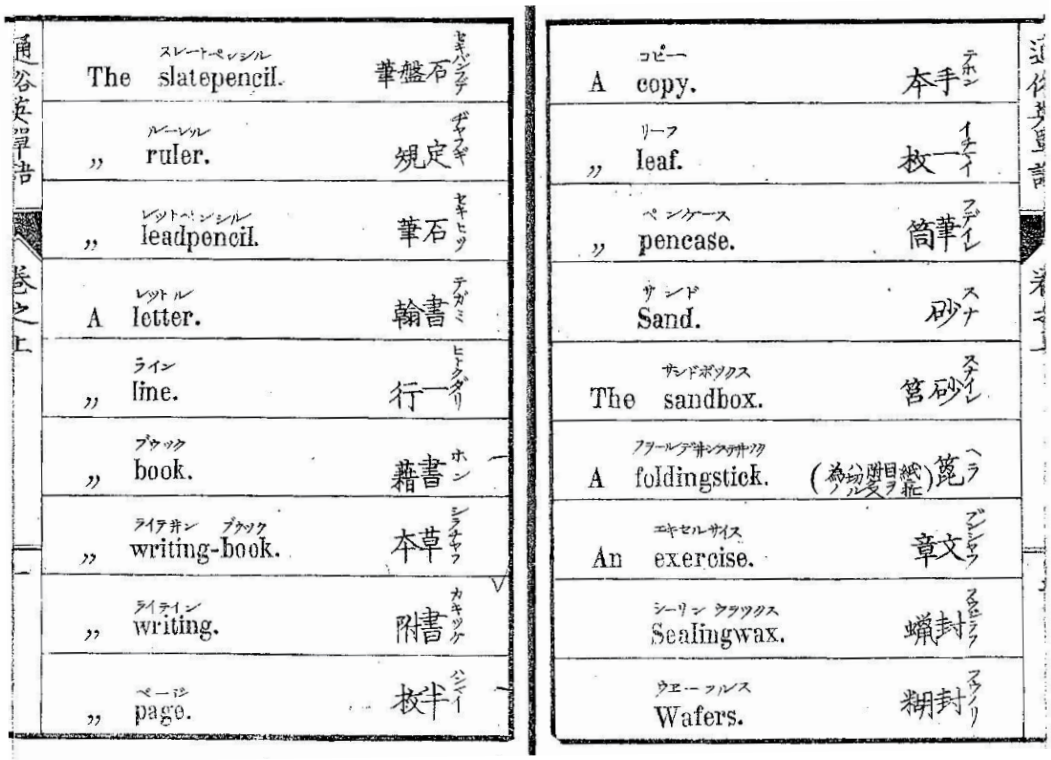

図 2.『通俗英単』上巻における “leaf.” の見開き頁［国会図書館蔵］

とがうなずける。そのような訳語を引き継いだ『通俗英単』であるからして、本書の訳語も質が高いことに間違いはないのだが、それでもなおいくつかの制限は存在する。それは、『英仏単語篇注解』の時点で訳出が行われていない見出し語である。たとえば、「An admiral（アドミラール） 役名 アドミラール」、「A midshipmen（ミッドシップメン） ミツドシツプメン」のように、適切な訳語を見いだすことができなかったのであろうか、カナ発音の表記をそのまま訳語に転記する傾向がみられるのである。『英仏単語篇注解』の訳語に大きく依存する『通俗英単』も当然、そのまま収録されてしまっている。誤った訳出は、学習者に誤解を与えかねないため避けるべきだが、前記のような記載のままでも学習者が語彙の意味を理解できないことはいうまでもない。そのような意味では、『通俗英単』の訳語にもまた独自性を見いだすのは難しい。

そのほか、これまでほとんど指摘されていないが、『通俗英単』には明らかな誤刻が存在する。それは見出し語の *leaf* に注目すれば容易に理解できる。図 2 の右頁を見ると、冠詞の省略をあらわす「〃」のあとに “leaf.” という見出し語がある。冠詞のあとにつづく語は小文字から始まるはずだが、よく見ると、Lの小文字ではなく、iの大文字 (I) が使われているように見える。図 2 内の左側に記された “The slatepencil.”（スレートペンシル）、“〃 ruler.”（ルーレル）、“A letter.”（レットル）、“〃 line.”（ライン）におけるLの小文字を見ても同様の傾向がみられる。では、『通俗英単』においてLの小文字をすべてiの大文字であらわしているかといえば、必ずしもそうではない。つづく図 3 では『通俗英単』の別頁を掲げたが、その右側に示される “〃 waterfall.”、“The land.” に注目されたい。これらにも見出し語にLの小文字が含まれているが、わずかながらその字体は前述のものと異なる。図 2 で示した例の場合、アルファベットの一画目部分が左右に伸びていることから、iの大文字が使われて

いることが理解できる。反して、図3においては一画目部分が左側にしか伸びておらず、こちらが正規のLの小文字だということが理解できる。つづいて、図3の左側を見ると、*Light*という見出し語が見えるが、『通俗英単』の表記にならうと“LIght”との表記である。なぜかiが大文字となっているが、このIを先述の“leaf”などで見られたものと比較すると、その字体が完全に一致する。つまり、『通俗英単』ではLの大文字がlとIで混同して用いられているのである。なお、当該の誤りはもともとの『英吉利単語篇』にはなかったものであるからして、『通俗英単』が編まれた際に新しく生じたのだろう。前述の『通俗英単』から影響を受けた後続の英学書の中にも、これと同一の誤りが踏襲される様子が散見される。

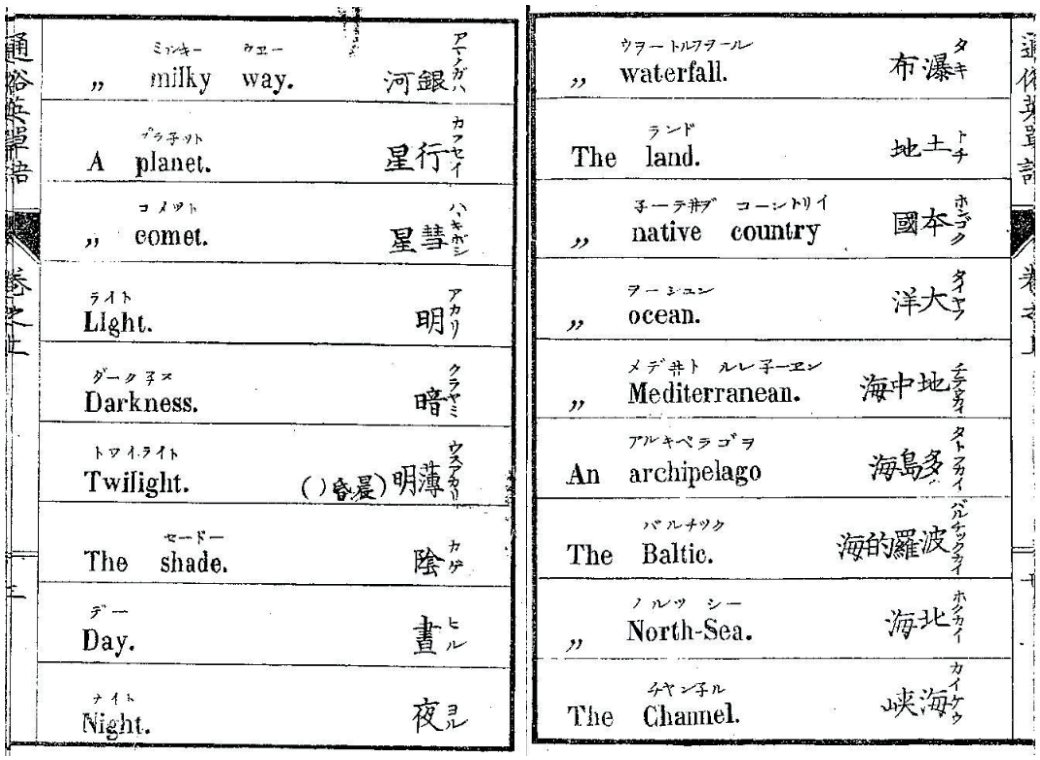

図3.『通俗英単』上巻の本文6頁目（左）と13頁目（右）［国会図書館蔵］

『通俗英単』の序文にもあったように、本書は師や友人に乏しい地方の人びとが独習できるよう編まれた英語入門書である。まわりに頼る者のいない英語初学者にとって、英語綴りの誤りは時に学習の阻害を生みかねない問題である。もちろん、本論で述べた誤りだけで『通俗英単』が糾弾されるべきではないが、『通俗英単』の編纂意図をふまえたうえで考えた場合、もう少し慎重に編まれるべきであったのかもしれない。

また、『通俗英単』の中には、見返し題の部分に「一名英語早引」という文言が付されたものがある点を前に述べたが、関場（2005、p. 17）によれば、ここでの「早引」とは「現代でも書名によく見かける『早わかり』に相当するもので、ぱっと見てすぐわかる、すぐに見つけ出せるといった意味」だという。しかし、渡辺（1962a）や池上・鈴木・東郷・橋本（1967）も指摘するように、『通俗英単』では、もとの『英吉利単語篇』の見出し語に配されていた通し番号が採用されて

いない。見出し語がアルファベット順であるわけでもなく、後ろに索引が付随しているわけでもないため、少なくとも「早引」の文言に対してそのような使用は制限されてしまう。渡辺も述べるとおり、一種の販売促進の宣伝効果をねらったにすぎない可能性も否定できないのである。

ここまで『通俗英単』の見出し語の選定方法、配列、カナ発音、訳語の質などについて検討してきたが、本書が当時のほかの教材に比べて際立った特徴やくふうが存在したと判断することは難しい。たしかに、見出し語の選定方法や配列、そして訳語についてはこれまでの研究において肯定的な評価が多かったうえに、じっさいにいくつかのカナ発音が正確であったり、見出し語の訳語も丁寧に訳し分けられたりしているといった様子から、学習を促進しうるくふうも見いだすことはできた。だが、それは『通俗英単』が依拠したもともとの教材の質が高かったというだけで、『通俗英単』が固有にもつ独自性ではないことが明確となった。『通俗英単』に似た特徴をもつ単語集が同時期に刊行されていた点もふまえると、『通俗英単』が大きな影響力をもつに至ったより大きな理由は、ほかにあると考えるのが妥当であろう。

4.5. 仮説3：先行書の存在から見た『通俗英単』刊行の意義

本論ではここまで、著者である梅浦元善の経歴や教材としての質が『通俗英単』の需要増大にどのように結びついているかを検討してきたが、いずれも明確な関連性を見いだすには至らなかった。そこで本小節では、『通俗英単』以前における同系統の英学書の存在が、『通俗英単』の編纂になんらかの影響を及ぼしているのかについて検討し、本書の影響力が増大した契機を明らかにすることをめざす。

『通俗英単』以前に刊行された『英吉利単語篇』にかかわる英学書にはつぎのようなものがあげられる（表 2）。

表 2.『通俗英単』以前に存在した同系統の英学書一覧とその内訳

書名	著者･編者･訳者など	刊行年	英語見出し語	訳語	カナ発音	出版系統
『英吉利単語篇』	開成所	1866	○	×	×	官版
『英仏単語篇注解』	開物社	1867	×	○	×	準官版
『対訳名物図編』	買山迂夫著	1867	○	○	○	民間（配り本）
『英仏単語便覧』上巻	桂川甫策著	1868	○	○	×	準官版
『官許 英吉利単語篇』	開成所原版	1870	○	×	×	民間
『英仏単語便覧』下巻	桂川甫策著	1870	○	○	×	準官版
『増補新刻 英吉利単語篇』	開成所原版	1871	○	×	×	民間
『通俗英単』	梅浦元善訳	1871	○	○	○	民間

注：筆者作成.

表 2 を見れば改めてわかるとおり、1866 年刊の『英吉利単語篇』には英語の見出し語しか収録されていないが、意図的に訳語が挿入されなかった可能性を指摘するのは櫻井（2000b; 2014）である。それによれば、本書は開成所の教科書として編まれた語彙学習教材で、訳語は授業内で教授することを想定していたと考えられるのだという。教育機関向けに編まれたものであったがゆえに、『英吉利単語篇』は開成所に通う学生以外の目に入ることはほとんどなかったと思われるが、いずれにせよ、訳語が併記されていなかったという点をふまえると、本書の使用範囲は極

めて限られていたと考えてよい。

1867 年 5 月には、『英吉利単語篇』の訳語だけが収録された『英仏単語篇注解』が発刊された。両書を相互に参照することで事実上、独力で英単語が学べるようになったため、若干の利用幅は広がったであろう。ただ、『英仏単語篇注解』も準官版のような位置づけであったため、『英吉利単語篇』と同様に世間一般の手に広く渡ったかどうかは定かでない。また、見出し語に対応する発音表記が欠けているため、音声を用いた学習という観点では、その利便性はいささか低くなる。しかし、その点を補うかのように、同年 9 月には『対訳名物図編』という単語集が民間から登場した。本書も『英吉利単語篇』と同じ 1,490 語を収録していたが、それらに訳語を与えただけでなく、各見出し語に対応したカナ発音を記載した点が画期的であった[13]。『英吉利単語篇』および『英仏単語篇注解』はそれぞれ官版と準官版の位置づけであったため、利用者が限られていた点は先にも述べた。それをふまえると、『対訳名物図編』は一庶民から刊行された単語集として、これまでより多くの学習者の手にわたる可能性を高めたことは間違いない。そのような意味において、『対訳名物図編』の存在は『英吉利単語篇』系統の単語集の系譜を考えるうえで重要な役割を担っていたと考えられる。ただし、本書には刊記や奥付も見られないため、「いわゆる配り本としてのみ刊行された本であり、書肆での売り広めは行われなかった」（櫻井、2017、p. 30）との見解を考慮すると、『対訳名物図編』の影響力はそこまで大きなものではなかった可能性を否定できない。

1868 年には、『英吉利単語篇』に対応した英仏両語の見出し語と、その訳語を収録した『英仏単語便覧』上巻が刊行され、1870 年に下巻の刊行によって内容が完結したが、これらも準官版の位置づけであったとともに、カナ発音を欠いている点は表 2 でも示すとおりである。他方で、1870 年と 71 年にはそれぞれ『官許 英吉利単語篇』と『増補新刻 英吉利単語篇』が刊行されたが、両書は民間から刊行されたため、官版や準官版のものに比べてより広く、より多くの学習者の手にわたる機会を提供したといえよう。同じ民間刊行の『対訳名物図編』と比べた場合、やはり訳語やカナ発音が併記されていない『官許 英吉利単語篇』と『増補新刻 英吉利単語篇』を活用できる人びとは、必ずしも多くなかったと推察されるが、『対訳名物図編』が配り本であったのに対して、『官許 英吉利単語篇』と『増補新刻 英吉利単語篇』は東京と京都でそれぞれ出版されたため、『英吉利単語篇』の知名度を高める働きには十分に寄与したと考えられる。

以上の系譜をふまえると、『英吉利単語篇』系統の教材はさまざまな形式や出版系統をもって世に広がっていったことが理解できよう。しかし、これまで見てきたとおり、ある教材は独習に不向きなために使用者が制限され、またある教材は内容が充実していても出版系統の狭さによって、使用者が制限されるなど一長一短であった。ただ一方で、『英吉利単語篇』を源流とする教材の知名度は、着実に当時の日本人のあいだに浸透し始めていたと考えられる。そうしたなかで、『通俗英単』はこれまでの『英吉利単語篇』系統の教材が抱えていた問題をすべて払拭したかたちで編纂されたと考えれば、『通俗英単』が当時の学習者から熱烈な歓迎を受ける点にもうなずけるといえよう。

5. まとめ：『通俗 英吉利単語篇』はなぜ売れたか

本論では、『通俗英単』が日本において多大な影響力をもった理由について、3 つの仮説を立てて検討した。第一に、著者である梅浦の権威性と『通俗英単』の影響力を高めたか否かについ

て検討を行ったが、そこに密接な関連性は見出せなかった。先行研究のとおり、梅浦の権威性は『通俗英単』が刊行されたあとに押しあげられたものであったと考えるのが妥当であり、その後、本研究で報告したような多くの英学書に影響を残すことになったといえよう。ただし、資料の少なさから、本論では限定的な議論に終始したことに注意されたい。前述のとおり、英学書編纂者の権威性や知名度が、編纂物の人気や評価に影響を与える可能性は皆無ではない。これらの関連性は本論では明らかにならなかったものの、一つの可能性として今後の研究に期待されるものだといえよう。

第二に、『通俗英単』が当時の教材として優れたものであったかを検討し、『通俗英単』がもつ影響力の潜在性を検討したが、そこでも明確な関連性を見いだすには至らなかった。たしかにいくつかの点では優れたくふうが見いだされたものの、それは『通俗英単』のもつ独自性ではなく、依拠した資料を踏襲した結果生じたものにすぎなかった。同時期の単語集の特徴をふまえても、『通俗英単』だけに特段優れたくふうが施されていたわけではなかったため、2 つ目の仮説も棄却されることとなった。

第三に、『通俗英単』にかかわる先行の英学書の系譜から、『通俗英単』の影響力を高める契機を探ったところ、ここで一つの答えを導き出すに至った。『通俗英単』の草分けである『英吉利単語篇』(1866) は、おもに江戸期における開成所の教科書として使われ、授業内で教授されることを前提としていたため、本文には訳語や発音表記の記載がなかった。そのため、庶民が本書を手にする機会は、この時はまだほぼ皆無であったといってよく、またたとえ手にすることができたとしても、独習には甚だ不便な内容であったことはいうまでもない。ゆえに、『英吉利単語篇』は利用者の範囲を自然と狭めてしまっていた。そのあと、前述の欠点を補うかのように、『英吉利単語篇』の訳語集ともいえる『英仏単語篇注解』(1867) が出版されたが、見出し語に対応したカナ発音はいまだ欠いている状態であった。そこで登場したのが『対訳名物図編』(1867) であった。『対訳名物図編』における強みは、官版系統の単語集において初めてカナ発音が示され、英語の見出し語や訳語を含めた独習用の形式がしっかりと整ったという点である。この点について学習者の多くは期待を寄せていただろうが、本書は最終的に配り本としての頒布にとどまり、全国的な拡がりをみせることは難しかったと考えられる。だが、幕府直轄の教育機関であった開成所の教材がもとにされているという事実は、一種の権威づけとなっていた可能性が高く、正規の教育機関による編纂物として、その質の高さは漠然とながらも期待されていたのではないだろうか。いずれにしても、『対訳名物図編』の刊行が『英吉利単語篇』の存在を世に広めた一つの要因であったことは否定できない。換言すれば、多くの学習者にとって官版系統の英学書の利用を強く望むきっかけの一つとなったのが、『対訳名物図編』の刊行であったといっても過言ではないのである。このような経緯をもって『英吉利単語篇』の知名度が徐々に高まり、明治維新を迎えると版元が民間へと移行し、『官許 英吉利単語篇』(1870) は東京から、『増補新刻 英吉利単語篇』(1871) は京都から相次いで出版された。これらは官版のそれと同様に訳語やカナ発音がなく、利用者の幅は限られたままであったが、官版から民間へと発刊元が変更されたことを機に、『英吉利単語篇』の存在がより多くの学習者に認知されるに至ったのは確かである。それは同時に、より多くの学習者が本書の利用を切望する契機ともなりえたはずである。そこで満を持して登場したのが『通俗英単』(1871) であったといえよう。序文で「山間僻遠師友に乏き人、其白本にして読難きを苦しむ」と述べ、従来の『英吉利単語篇』系統の英学書における問題点を説いた点も、独習書としての出版を待ち望む声に応えることを強調しているかのようである。整理すれば、『対訳名物図編』を含む一連の『英吉利単語篇』系統の英学書が刊行されたことで、それらの知名度が当

初からの権威とも相まって、教材としての質への期待や、独習書の体裁を整えた刊行への希望の高まりとともに人びとのあいだで拡がり始めた。そして、民間からの刊行が盛んになるとそれはいっそう加速していった。そうしたなか、好機とみて発刊されたのが『通俗英単』だったといえるのである。本書が大変な好評を博したことは必然であり、後続の単語集にも大きな影響を与えたのは自然な流れであったと考えられるのである。『通俗英単』が名声を得た背景には、著者の権威や教材としての質の高さよりもむしろ、当時の学習者のニーズを敏感に読みとり、時機を逃さず刊行へとつなげた梅浦の洞察力が大きく関連していたといえるのではないだろうか。依拠資料に『英吉利単語篇』を選んだ点も含め、梅浦の鑑識眼は改めて評価されるべきであろう。

6. おわりに

本論では、おもに明治時代における単語集、および英学書に焦点をあてて論じてきたが、本研究で導き出した結論は、現代にもつながる点がある。『通俗英単』は当時において、教材として特段優れていたわけではなかった。著者の編纂と刊行の時機がきわめて合理的だったのである。換言すれば、売れる教材が決して優れた教材ではないことを本論は改めて知らせてくれたのである。単語集の研究に話を絞れば、研究対象となるものの多くは著名な編纂者によるものや、当時において影響力の強かったものが多い。そのような教材こそが日本における英語語彙学習の一端を支えてきたことはいうまでもなく、決して軽視されるべきものではない。当然、そのなかにも優れた教材が含まれるのは事実であろう。だが、そのように光のあたらない中にも同様な教材がいまだ多く残っていると筆者は考えている。単語集のような参考書類は消長も激しく、どれだけくふうの凝らされた教材であったとしても、学習者の手に渡らなければすぐに姿を消してしまう。とりわけ、英学史や英語教育史の観点から教材を分析するにあたっては、そのような資料を探し、保存し、調査をすることが、変遷史のより緻密で正確な理解につながるといえるのではないだろうか。

註

1 より詳細な説明に関しては、熊谷（2021）を参照されたい。
2 略称は櫻井（2000a）にならったものである。
3 江戸時代に編纂されたおもな単語集については、熊谷（2019）を参照されたい。
4 『通俗 英吉利単語篇』上巻（特 34-91, https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/903080）および下巻（特 34-91, https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/903081）を参照。
5 「諳記黙識」という文言があるからしても、本書は単語集として編纂された意味合いが強いといえる。
6 白本とは、「原文のままで発音や訳などが表示されていない」（杉本、1985、p. 326）ものをさす。
7 『通俗英単』の二篇および三篇がじっさいに刊行されたという記録は残っていない。
8 英学書の影響関係を分析するための方法論は、おもに書誌学の見地にならったものである。具体的に述べると、書誌学とは「図書の書写、版、刷りを比較、判定し、原本とその伝播に関する研究を行うもの」であり、あるいは「その図書の版式、装丁、活字、紙質などの判定によって、それがつくられた場所、年代を確定し、同種の図書の異本と当該書とを識別するに至った理由を記述するもの」（廣庭・長友、1998、p. 22）だとされる。それらをふまえながら、筆者はおもに櫻井（2000b）で行われた英学書の調査を参考に、本研究を進めた。

9　筆者の調査は、国立国会図書館のデジタルライブラリーを用いて行なったため、それぞれはデジタルアーカイブで閲覧可能となっている（2021 年 9 月現在）。
10　より詳しく述べれば、書名の「節用集」とは、室町時代の半ばに成立した辞書をさす。元来、日本人は古語や外来語を含めた日用の国語語彙をイロハ順に並べ、その内部を部類分けする傾向があった。江戸時代に入ると内部の部類分けが廃され、より簡便に語彙を検索できる「早引節用集」の体裁が誕生した（関場、2005）。携行に便利な小型辞書となった節用集は明治時代に最盛期を迎え、種々なタイプの異本が登場するようになった（佐藤、1990）。
11　『蘭文英文典初歩』とは、長崎の洋語伝習所がそなえつけられていた西役所で 1857 年に刊行された蘭英単語・会話集で、蘭書翻刻の一環として編纂された（櫻井、2014）。
12　櫻井は、渡辺（1964）の主張に賛同するようなかたちで意見を述べている。
13　本書については熊谷（2019）でも言及しているため、適宜参照されたい。

参考文献

池上義雄・鈴木博・東郷吉男・橋本敏治（1967）.『京都市立西京商業高等学校所蔵 洋学関係資料解題 1』京都市立西京商業高等学校.

大阪女子大学付属図書館（編）（1962）.『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』大阪女子大学.

大阪女子大学付属図書館（編）（1991）.『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』大阪女子大学.

大村喜吉・高梨健吉・出来成訓（編）（1980）.『英語教育史資料 第 5 巻』東京法令出版.

蒲原 宏（1985）.「梅浦精一（元善）の生涯と業績」『英学史研究』17, 67-76.

熊谷允岐（2019）.「日本人と単語集：日本における英語語彙学習教材史：江戸編」『異文化コミュニケーション論集』17, 41-56. 立教大学異文化コミュニケーション研究科.

熊谷允岐（2020）.「日本英語教育史研究における英単語集の位置づけ」『異文化コミュニケーション論集』18, 25-41. 立教大学異文化コミュニケーション研究科.

熊谷允岐（2021）.『官許 英吉利単語篇』の系譜 ――底本の再検討と後続の単語集への影響関係（1）――」日本英語教育史研究 36, 23-48.

櫻井豪人（1998）.「『英吉利単語篇』『法朗西単語篇』の底本と『英仏単語篇注解』の訳語」『国語学』192, 92-79.

櫻井豪人（2000a）.「『英吉利単語篇』系統単語集の影響関係」『名古屋大学人文科学研究』29, 103-123. 名古屋大学大学院文学研究科.

櫻井豪人（2000b）.『維新前後西洋語対訳単語集の基礎的研究』名古屋大学大学院博士論文［未刊行］.

櫻井豪人（2014）.『開成所単語集 I　英吉利単語篇・法朗西単語篇・英仏単語篇注解・対照表・索引』港の人.

櫻井豪人（2017）.『開成所単語集 II　Baedeker 原本・対訳名物図編・英仏単語便覧・対照表 2』港の人.

佐藤貴裕（1990）.「早引節用集の流布について」国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究 11』(pp. 277-302). 和泉書院.

杉本つとむ（1985）.『日本英語文化史の研究』八坂書房.

関場武（2005）.「通俗和英節用集：明治期英和・和英節用集の世界（その 1）」『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』46, 9-17. 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会.

出来成訓（1980）.「『英吉利単語篇』」大村喜吉・高梨健吉・出来成訓（編）『英語教育史資料 第 5 巻』(p. 10). 東京法令出版.

原口裕（1991a）.「『通俗 英吉利単語篇』訳語索引」『女子大文学 国文篇』42, 1-37. 大阪女子大学.

原口裕（1991b）.「単語集・会話書」大阪女子大学付属図書館（編）『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』(pp. 83-125). 大阪女子大学.

廣庭基介・長友千代治（1998）.『日本書誌学を学ぶ人のために』世界思想社.

屋名池誠（1991）.「綴字書・運筆書・横文字紹介書」大阪女子大学付属図書館（編）『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』(pp. 39-82). 大阪女子大学.

呂麗敏（2000）.『明治初期英学資料「袖珍 英和節用集」第二編の成立：国語史資料研究における洋学資料』甲南女子大学大学院博士論文［未刊行］.

渡辺実（1962a）.「通俗 英吉利単語篇（一名英語早引）」大阪女子大学付属図書館（編）『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(pp. 249-254). 大阪女子大学.

渡辺実（1962b）.「英学童観抄 壱之巻」大阪女子大学付属図書館（編）『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(pp. 540-542). 大阪女子大学.

渡辺実（1962c）.「西洋画引節用集 二編」大阪女子大学付属図書館（編）『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(pp. 548-550). 大阪女子大学.

渡辺実（1962d）.「英国単語字類」大阪女子大学付属図書館（編）『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(pp. 496-498). 大阪女子大学.

渡辺実（1962e）.「英吉利単語篇」大阪女子大学付属図書館（編）『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(pp. 123-132). 大阪女子大学.

渡辺実（1962f）.「横文字独学 二編上」大阪女子大学付属図書館（編）『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(pp. 285-287). 大阪女子大学.

渡辺実（1964）.「幕府の英仏独語研究の展開」『人文』10, 33-55. 京都大学教養部.